読売新聞　平成20年4月11日掲載

中高年生活を学ぶ本格的な生涯学習講座が大学で開講した。

大学で後半生の礎固め

教育ルネサンス　№812　シニアの学び　4

桜が満開となった東京・池袋の立教大学のチャペルは、新入生の笑顔があふれるキャンパスとは対照的とも言える厳粛な雰囲気に包まれていた。4日に行われた、「立教セカンドステージ（SS）大学入学式」に臨んだのは壮年の男女96人。入学資格は50歳以上。認可を受けた正式な大学ではない。

だが、入学式を大学のシンボルで行うということ以外にも、これまでの生涯学習講座と大きく異なる点がある。

必修科目には「現代世界論」「超高齢社会論」、選択科目には、「現代史の中の自分史」「セカンドステージとリーダーシップ論」「NPO／NGO・ボランティア活動基礎編」「生涯現役という生き方」といった科目名が並ぶ。シニア生活の礎となる知識を、幅広く習得することを強く意識したカリキュラムだ。

修了には1年間在学して10科目を修める必要があり、ゼミも必修。個別に研究テーマが課せられ、卒論にあたる修了報告書の作成もする。

＊

笠原清志・立教大副総長(59)は、団塊世代の一人。ここ数年、団塊を対象にした生涯学習講座が乱立したにもかかわらず、退職後に家庭や地域に居場所を見つけられない中高年の現状に、違和感を感じてきた。

「定年退職後の生活は、在職時とは激変する。ところが地域に出ようにも隣近所の家族の顔さえ知らず、会社の論理を持ち出せば地域になじめない。妻にとっても夫が四六時中家にいる生活は、大きな変化だ。大学は社会に巣立つ若者を育てるが、シニア生活に入る男女にも、大学が学びを用意すべきではないか」

趣味の知識より〝実学〟を重視した講座に人が集まるか不安もあった。昨秋に募集を始めると、約1000人から資料の請求があり、70人の定員に170人が申し込んだ。

志望動機のエッセー250字と書類による審査、面接を経て、選抜した入学者96人の平均年齢は60歳で、最高齢は85歳。「家庭の事情で大学に進めず、今度こそ学びたい」「他大学で生涯学習講座を受けたが、満足できない」といった声が多かった。

入学者の一人、千葉市の高野晋さん(60)も団塊の世代だ。6月に退職予定で、シニア生活を意識し始めた昨秋、立教SS大の開校を新聞記事で知った。

「自分が今後、やりたいことを見つけるために、まず1年間、勉強してみたかった。約40年間の会社生活をリフレッシュし、会社以外の友人も作っておきたい」

笠原さんは「これからの大学は若者だけでなく、地域の多様な人材を教育すべきだ。立教SS大は大学の新しいビジネスモデルにしたい。立教から中高年教育のルネサンスを始める」と意気込む。

シニア生活に入る中高年を「新1年生」とする学習講座が定着するのか。立教SS大の成否に、大学関係者の注目も集まっている。

（宮崎敦）

立教セカンドステージ大学の入学式に臨む受講生たち。評論家の立花隆さん（手前左）も講師陣の一人だ（4日）＝川口正峰撮影

団塊世代の進学率　文部科学省の学校基本調査によると、団塊世代（1947～49年生まれ）の高校進学率（62～64年）は64～69％。大学・短大進学率（65～67年）は16、17％台で、男性は20～22％台、女性はそのほぼ半分しかなかった。中卒者が「金の卵」ともてはやされた時代に、経済的な事情などで、大学進学を断念した人も多かった。

ご意見は〒100・8055読売新聞東京本社教育取材班へ。ファクス03・3217・9908、メールkyouiku@yomiuri.com